



Across the Universe

星の季節に、宇宙を読んでみませんか。



世界天文年2009

小説「冥王星パーティ」

平山瑞穂著 新潮社刊
請求記号：Fヒ 所蔵館：篠崎ほか
いつも男の選択を間違っちゃう祥子。その彼女が逃げ込んだのは冥王星！ でも、なぜ、そんなところに！？

CD 交響曲第41番「ジュピター」

モーツァルト
請求記号：C1モ-05140
文句なしの完全性は宇宙の構造に通じます。

宮沢賢治は夜空を見上げて銀河鉄道を想像し、サン=テグジュペリは星々の一つを「星の王子様」の住む小さな星と想像しました…。皆さんも、親子で、夫婦で、恋人同士で、友人同士で、夏の星を眺めながら色んな空想をして楽しんでみませんか？
今年は世界天文年であり、日本で皆既日食が見られる年です。図書館の資料で予習をして、望遠鏡を片手に空を見上げてみましょう！

1609年にイタリアの科学者、ガリレオが初めて望遠鏡を使って天体観測をしました。その時から今年で400年！ これを記念して2009年を国際連合、ユネスコ（国連教育科学文化機関）、国際天文学連合は、「世界天文年（International Year of Astronomy）」と決めました。

科学「国際宇宙ステーションとはなにか」

若田光一著 講談社刊（ブルーバックス）
請求記号：538ワ 所蔵館：篠崎ほか
国産宇宙飛行士のエースが、無重力空間で足を踏みしめ、宇宙ビッグサイエンスの恒久基地＝国際宇宙ステーションについて考えました。

小説「アンドロメダ病原体」

マイクル・クライトン著 早川書房刊
請求記号：B933ク 所蔵館：篠崎・中央ほか
人工衛星が宇宙から拾ってきた病原体がすさまじい災厄を引き起こす。感染症の最高レベルの封じ込めは間に合うか。

小説「土星の環」

W. G. ゼーバルト著 白水社刊
請求記号：945セ 所蔵館：篠崎ほか
消え去った時空間がここに…。人生に少し倦み疲れたら、ゼーバルトを1冊。出口が見えるかもしれません。

星を感じる本・音楽セクション

CD 組曲「惑星」

ホルスト
請求記号：C3ホ-05139
20世紀の名作をメータの名演で。

小説「海神（ネプチューン）の晩餐」

若竹七海著 光文社刊
請求記号：Fワ 所蔵館：小岩・東部
古きよき大洋航路で事件は起こった。海神（ネプチューン）は事件のすべてを見そなわす。

小説「星に願いを」

庄野潤三著 講談社刊
請求記号：Fシ 所蔵館：篠崎ほか
老夫婦たちの日常が、この作家らしい家庭的で叙情味のある文体で描かれています。とても、ほっとしますよ。

エッセイ「月光を浴びながら暮らすこと」

宮迫千鶴著 毎日新聞社刊
請求記号：914ミ 所蔵館：篠崎・中央
月光を浴びるとなぜかところが華やき、靈感が鋭くなるという。論客、ミヤサコがルナティックに月光の効を語ります。

小説「シリウスの道」

藤原伊織著 文芸春秋刊
請求記号：Fフ 所蔵館：篠崎ほか
広吉代理店に勤める辰村には、25年前から隠し続ける、友との秘密があったのだが…。惜しくも早世した作者が残した青い光芒のようなサスペンス。

科学「ハッブル望遠鏡が見た宇宙」

野本陽代・R. ウィリアムズ著 岩波新書
請求記号：440ノ 所蔵館：篠崎ほか
シビれるほどに鮮やかな天空の果ての星たち。ハッブル望遠鏡がやった仕事は大偉業です！

紀行「火山とクレーターを旅する」

白尾元理著 地人書館刊
請求記号：453シ 所蔵館：篠崎
地球上に宇宙がつけたキズ跡（クレーター）の上に立ち、考える。地球の鼓動や人々の息吹きを…。著者の探究心は尽きません。

今年は7月22日に、奄美大島北部やトカラ列島付近などで、日本では46年ぶりに皆既日食（太陽が月の影に完全に隠れる）が見られ、東京でも同日11時10分頃、太陽の75%が欠けるのが見られます。数十年に一度の機会、ぜひ晴天を期待しましょう！（※日食を見るのはサングラスや黒い下敷き等を通して危険です！専門のメガネをお使い下さい。）

梅雨が明ければ、関東地方は比較的晴天の日が多く、天体観測にはもってこいです。東京では、河川敷など、街灯があまりない場所が観測場所におすすめです。8月中旬の20時頃だと、南の空にさそり座の主星アンタレスが、東の空からは「夏の三大角」と呼ばれる、白鳥座のデネブ、わし座のアルタイル（ひこぼし）、こと座のベガ（おりひめぼし）の一等星4つが肉眼でも見つかるはすです。ぜひ星座早見盤や双眼鏡、小望遠鏡でより多くの星たちと星座

を探してみてください。

篠崎図書館では7月に特集展示コーナーにて「宇宙（そら）～世界天文年～」をテーマに天文学や星、神話の本、宇宙が描かれた小説などを展示します。また、当館の07の番号の棚に多くの関連書（背表紙のラベル440や444＝天文学）を揃え皆様をお待ちしています。この夏は、篠崎図書館を「使って」天体観測・・・などはいかがですか？



江戸川まいにんぐ 発掘 第7回

星にいちばん近い場所

「区内路上観察」で遭遇した、けっこうレアで、それでいてけっこう役立ちそう、な情報を毎回お届けしています。

江戸川区でいちばん星に近い場所。それは旧江戸川の川べりにある清掃工場の煙突のてっぺんです。高さ150メートル、直径は基部で12.5メートル、頂上で6.8メートルの煙突は見上げると威風堂々、まるで高射砲のようで、ジュール・ヴェルヌのSF「月世界旅行」に登場する、宇宙船（砲弾）を月に向かって撃つ巨大な大砲をも連想させます。ちなみに、我が国では故・大杉勝男氏が「月に向かって打ちました。（ドーでもいっわ）」

「月世界旅行」は、人類を初めて月に運んだアポロ11号の奇しくも100年前にあたる1869年に発刊されました。南北戦争が終わって無聊（ぶりょう）をかこつアメリカの大砲技術屋が「民間への技術移転」の発想で生き残ろうとして900

フィート（274メートル）の砲をフロリダで鋳造し、3人十丈大砲を乗せた砲車を撃ち上げました。12000ヤード／秒（約11キロメートル／秒）の初速度は地球の引力圏を脱するのに必要な速度（第2宇宙速度）にぴったり合っていて、当時の欧米宇宙物理学の成熟を推し量るに足ります。

月を周回してみごと帰還した「宇宙飛行士」たちはびんびんしてしまっていて、どうやって発射時の衝撃や大気圏再突入の熱に耐えたのか、空想科学研究所の主宰者であらせられる柳田理科男先生の考証を待ちたいものです。

白塗りの表面にペイントされたユリカモメがとっても江戸川区らしい煙突は、大気圏の底の底にうずくまりながらも天と向き合っています。



江戸川区最高地点